
星

キキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星

【著者名】

キキ

【Zコード】

N7749V

【あらすじ】

以前、自分のブログに載せた作品です。

夏至祭りが近づく夜、ふたりは星空を眺めていた。
沙茄は星をつかまえることのできる巫女のひとり。
彼女は少年のために、祈りを込めて星をひとつ落とすのである。

(前書き)

富沢賢治の「双子の囁」について童話からインスピレーションを取って書いた作品です。

「祈つてあげるから」と彼女は言った。

小さな鈴の音が響いた。沙茄の両手が星空に向かつてすっと伸びた。手首に巻いた飾りが揺れていた。麻を編んだ腕輪には、花のよう不可憐な釣鐘型の鈴が連なっていた。彼女が自分で作つた魔除けの装身具だ。それは松明の光を受けて、ゆらゆらと白く輝いていた。僕は幾分気が楽になつて、僕のために祈つてくれている彼女の横顔に話しかけた。

「今度の夏至祭りには星がたくさん降るつて本当？」

彼女は腕を下ろしてそつと呟いた。

「世良は篝星を見たことはある？」

僕は頷いた。

「見たよ。沙茄が去年の祭りで呼んだじゃないか。でも、僕はあなたに綺麗な星が悪さをするなんて、とても信じられないな」
村では毎年、鎮守神に豊作を感謝する祭りが行われる。沙茄は母親のあとを継いで、巫女として宴の前には社で舞を踊るのだ。

童話によると、空に浮かぶ水晶のお宮には双子の童子が暮らしている。篝星は双子の童子をだました悪い星だ。その罰として、篝星は王様に体をバラバラにされて黒い海に落とされた。星が降ると、村人は決まって「あいつがまた悪さしたんだな」と言うのである。沙茄の髪が風を含んでふわりと揺れた。着物の袖を抑えながら、彼女は左手を正面に伸ばして宙をつかんだ。

「つかまえた」

鈴が鳴り、沙茄はこちらに向き直つた。僕は彼女の手の中のものが見たくて駆け寄つた。

沙茄は少し微笑んで掌を開いた。

火の粉のような小さな光が震えていた。それは今にも消えてしまいそうだったが、息を吹きかけると、燐光を保とうとするかのよう

にひとりきわ輝きを増した。

「双子の童子が、空のお面で笛を吹いている間だけ、星の砂が降つ
てくるのよ」

(後書き)

続きがあるような終わり方ですが、いまのところ続きを書く予定はないです。

また、機会があれば、沙茄と世良の物語の続きをつなげて行きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7749v/>

星

2011年10月9日13時26分発行